

オーストラリア学会 2018 年度全国研究大会のご案内

開催日： 2018 年 6 月 9 日（土）・10 日（日）

会 場： 筑波大学筑波キャンパス（〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1）

1. 大会スケジュール

□ 第 1 日目 6 月 9 日（土）

- 10:00~12:00 理事会（総合研究棟 A205 室）
13:00 受付開始（総合研究棟 A 1F ロビー）
13:30 開会セレモニー（総合研究棟 A110 公開講義室）
司会 佐和田敬司（オーストラリア学会副代表理事・早稲田大学）
開会挨拶 鎌田真弓（オーストラリア学会代表理事・名古屋商科大学）
開催校挨拶
オーストラリア大使館・豪日交流基金よりご挨拶
- 14:00~14:45 特別講演（豪日交流基金助成）（総合研究棟 A110 公開講義室）※同時通訳あり
“Diplomatic Interventions: Aboriginal Performance on the International Stage in the 21st Century”, ヘレン・ギルバート（東京大学アメリカ太平洋地域研究センター客員教授／ロンドン大学教授）
- 15:00~17:30 豪日交流基金（A J F）助成企画「The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives」
（その 1） “Contemporary Transformation of Australian Economic Geography”（総合研究棟 A110 公開講義室）※同時通訳あり
報 告 者：ケヴィン・オコナー（メルボルン大学名誉教授）
南出眞助（追手門学院大学）
吉田道代（和歌山大学）
堤 純（筑波大学）
コメンテーター：谷内 達（東京大学名誉教授）
質疑応答
- 18:00~20:00 懇親会（筑波大学第二エリア 2B 棟 1F Cafe MARHABAN）
※懇親会終了後、つくばエクスプレスつくば駅までチャーターバスが出ます。

□ 第 2 日目 6 月 10 日（日）

- 08:45 受付開始（総合研究棟 A 1F ロビー）
09:00~10:45 一般個別研究報告（総合研究棟 A110 公開講義室）
10:45~11:00 Coffee Break
11:00~12:00 テーマセッション（総合研究棟 A110 公開講義室）
12:00~13:00 昼食休憩（総合研究棟 A107 室）／理事会（総合研究棟 A205 室）
13:15~13:45 総会（総合研究棟 A110 公開講義室）
14:00~16:50 豪日交流基金（A J F）助成企画「The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives」
（その 2） 「1988 年をふりかえる：入植 200 周年以降の先住民・非先住民関係」（総合研究棟 A110 公開講義室）
報告者：栗田梨津子（広島大学）
津田博司（筑波大学）
一谷智子（西南学院大学）
討論者：窪田幸子（神戸大学）
藤川隆男（大阪大学）
加藤めぐみ（明星大学）

16:50

- ◆ 昼食：両日とも、控室にサンドウィッチ等の軽食を用意します（60人分程度）。会場周辺の徒歩圏内には食堂やコンビニがありません。しっかり食べたい方は、ご自身で昼食をお持ち下さい。
- ◆ 懇親会：懇親会費は 5,000 円（学生会員 4,000 円）を予定していますが、多少変動することがあるかもしれませんので、その節はご容赦ください。懇親会費は当日大会受付で申し受けます。なお、懇親会への参加は、5月31日（木）までにお知らせくださるようお願いいたします。

※『豪日交流基金（AJF）助成企画 The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives（その1、2）』は豪日交流基金によりオーストラリア政府外務貿易省の助成を受けています。



2. 特別講演・シンポジウム・特別企画概要

特別講演

“Diplomatic Interventions: Aboriginal Performance on the International Stage in the 21st Century”

Helen Gilbert

This presentation examines the workings of cultural diplomacy in the arts by canvassing recent Aboriginal Australian performances that have been staged in international venues in connection with festivals, exhibitions and other cross-cultural initiatives. It explores not only the ways in which indigenous embodied arts have been harnessed to celebrate Australia's achievements (at home and abroad) while promoting particular institutions and events, but also how Aboriginal performance-makers strive to shape their own cultural and artistic encounters with diverse audiences. Case studies to be discussed in brief include Big hArt's presentation of Namatjira in London in 2013, Marrugeku's tours of Gudirr Gudirr to Europe (2013–14) and Toronto (2015) and the staging of Jack Charles V the Crown in Shizuoka (2017). Keeping in view the limitations of the 'culture-as-resource' model (Yúdice) in promoting cross-cultural dialogue, I consider the performances at issue as making compelling invitations to their audiences to see, sense and understand the challenges facing indigenous societies today and to acknowledge their root causes in European colonialism. Such invitations can be seen as part of an emergent trans-indigenous public sphere where (soft) diplomacy is being reimagined as a grass-roots activity. At the broader level, my research seeks to illuminate ways in which performative acts and aesthetics sustain indigenous cultures within, against and beyond the forces of the neo-liberal market place.

Helen Gilbert is Professor of Theatre at Royal Holloway, University of London, and author/co-author of several influential books, notably *Performance and Cosmopolitics: Cross-Cultural Transactions in Australasia* (2007) and *Postcolonial Drama: Theory, Practice, Politics* (1996). From 2009–14, she led a transnational European Research Council-funded project on indigenous performance across the Americas, the Pacific, Australia and South Africa. Her many edited books include *Recasting Commodity and Spectacle in the Indigenous Americas* (2014) and *In the Balance: Indigeneity, Performance, Globalization* (2017). She recently completed a fellowship at the Rachel Carson Centre for Environment and Society in Munich, supported by a Humboldt Prize, and is currently the visiting Chair of Australian Studies at the University of Tokyo for the 2017–18 academic year.

豪日交流基金 (AJF) 助成企画その1

The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives
“Contemporary Transformation of Australian Economic Geography”

第一報告者のメルボルン大学のオコナー名誉教授は、近年の国際コンテナ物流の変化とオーストラリアとアジア各国との航空旅客流動の変化の2つの視点から、オーストラリア経済のアジアシフトの動向について報告する。続いて追手門学院大学の南出教授は、グローバルな経済状況の変化が、具体的にオーストラリアの港湾取り扱い貨物にどのような変化を与えたかについて報告する。第三報告者の筑波大学の堤准教授は、オーストラリア経済のサービス産業化の傾向について報告する。最後に、第四報告者の和歌山大学の吉田教授は、新規移民（主として2000年以降）の急増ともなう現代オーストラリア社会の新しい動向について報告する。東京大学の谷内名誉教授は4者の報告についてコメントし、合わせて、フロアからの質問などを整理しながら現代オーストラリアの経済地理について総括する（企画担当者：堤 純会員）。

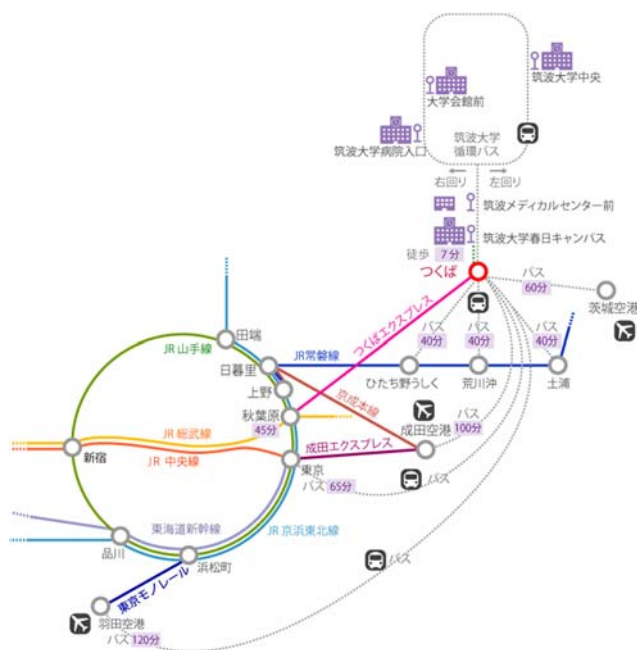
豪日交流基金 (AJF) 助成企画その2

The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives

「1988年をふりかえる：入植200周年以降の先住民・非先住民関係」

2018年は、オーストラリアという国家の成り立ちについて様々な反響を呼んだ入植200周年から、30年の節目にあたる。植民地主義や人種主義と結びついた「建国」に対する社会的関心の高まりとともに、過去および現在における先住民の経験をめぐる議論は、新たな段階を迎えることとなった。本シンポジウムでは、先住民史、非先住民史、その両者を横断する文化・芸術という三つの視点から、1988年から現在に至るまでの先住民をめぐる事象を回顧する。先住民史について人類学の立場から広島大学の栗田梨津子助教、非先住民史について歴史学の立場から筑波大学の津田博司助教、文化・芸術について文学の立場から西南学院大学の一谷智子教授が報告を行い、それぞれの分野からの応答として神戸大学の窪田幸子教授、大阪大学の藤川隆男教授、明星大学の加藤めぐみ教授が討論に参加する（企画担当者：津田博司会員）。

3. 交通アクセス



アクセスの詳細は、http://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba_access.html をご覧ください。なお、会場へのアクセスは、下記の①または②がおすすめです。

会場場所：〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 A1 階

①つくばエクスプレス (TX) つくば駅 (地下) 到着後、地上のつくばセンターバスターミナル 6 番乗り場から、「筑波大学中央」行きのバス、または「筑波大学循環」(左回り) バスに乗り、「筑波大学中央」バス停で下車 (つくばセンター～筑波大学中央までの所要約 20 分)。会場の総合研究棟 A はバス停から徒歩 1 分です。
(つくばセンター6 番乗り場バス時刻表 http://kantetsu.co.jp/bus/timetable_files/center/center06.pdf)

②東京駅八重洲南口バスターミナル (2 番乗り場) から、常磐高速バス「筑波大学中央」行きのバスに乗り、終点の「筑波大学中央」バス停で下車。会場の総合研究棟 A はバス停から徒歩 1 分です。
(東京駅 2 番乗り場バス時刻表 http://kantetsu.co.jp/img/bus/highway/tsukuba_tokyo/timetable.pdf)